

P1-48-5 早産既往妊婦の妊娠予後についての検討

国立成育医療研究センター周産期センター

田沼有希子, 青木宏明, 鈴木朋, 杉林里佳, 佐々木愛子, 渡邊典芳, 塚原優己, 久保隆彦, 名取道也, 左合治彦

【目的】我が国の早産率は約6%と欧米に比べ低率であるが、漸増傾向であり早産予防は重要な課題である。早産のリスク因子といわれる早産既往例の妊娠予後から、介入の必要性について検討した。**【方法】**2009年1月から2011年8月までに当院で分娩となった症例で、1回以上早産の既往がある単胎142例の妊娠予後について、既往早産を自然早産既往群(陣痛発来、前期破水、絨毛膜羊膜炎、常位胎盤早期剥離)と人工早産既往群(妊娠高血圧症候群、前置胎盤などの母体適応、胎児発育不全、胎児機能不全、胎児異常、双胎妊娠)に分けて検討した。**【成績】**早産既往例での早産再発率は19.0%(27/142例)で、分娩時期はlate preterm(34週以上37週未満)が66.7%(18/27例)であった。自然早産既往群と人工早産既往群の早産再発率はそれぞれ24.1%(20/83例), 11.9%(7/59例)で、自然早産既往群で高い傾向があった($p=0.083$)。自然早産既往群のみで検討すると2回以上の早産既往は54.5%(6/11例)で今回も早産となり、1回既往の早産19.4%(14/72例)に比べ有意に高率であった($p<0.05$)。また、前回分娩が34週未満の症例では今回の早産率は23.3%(7/30例)であり、34週以降の症例の早産率24.5%(13/53例)と比較し差を認めなかった($p=1.00$)。**【結論】**これまでの報告と同様に早産既往例では早産再発率が高かった。再発率は人工早産既往群に比べ自然早産既往群で高い傾向があり、特に早産反復例で高かった。早産再発率は既往早産の週数とは関連しなかった。既往早産の週数に関わらず自然早産既往例には早産予防の介入を行う必要性が明らかとなり、反復早産既往では特に早産に留意した管理が必要である。

P1-48-6 妊婦一般を対象とした細菌性膣症スクリーニング検査と切迫早産および早産の関連についての検討

広島市立安佐市民病院

本田 裕, 高尾佑子, 岡本 啓, 本田奈央, 谷本博利, 寺本三枝, 寺本秀樹

【目的】細菌性膣症(BV)は早産の危険因子の一つと考えられているが、そのスクリーニング検査と治療については、まだ一定の見解がない。今回、妊娠一般を対象としたBVスクリーニング検査および治療が早産率の改善につながるか否かを後方視的に検討した。**【方法】**2009年4月1日から2011年3月31日までに当院で分娩した妊婦のうち、早産の原因となり得る合併症を除外した妊婦を、妊娠初期から当科で妊娠管理を行った群(A群:320例)とBVスクリーニング以外は当科と同様な管理を行う1医療機関で妊娠第2三半期まで妊娠管理を行った群(B群:578例)に分け、切迫早産の入院率、早産率について両群間の差異を χ^2 検定(有意水準1%)にて検討した。なお、膣分泌物はグラム染色しNugent scoreを用いて点数化し、4以上に対しメトロニダゾール膣錠250mgを7日間投与した。**【成績】**A群でのBVスクリーニング時期および治療時期はそれぞれ、平均16.9週、20.7週であり、正常群(NF)、中間群(IF)、BVの頻度はそれぞれ、69%、17%、14%であった。入院率、早産率は、A群が9.4%、3.4%に対し、B群では9.6%、3.6%で有意差を認めず、入院時の膣分泌物は、A群ではNF、IF、BVが67%、33%、0%、B群では54%、38%、8%で、両群ともBVスクリーニング時に比べIFが多い傾向にあった。また、両群の早産例とも入院時にBVと診断されたものはなかったが、IFの頻度はそれぞれ、60%、67%と上昇していた。**【結論】**妊娠一般を対象とするBVスクリーニングは、切迫早産の入院率や早産率を改善しないことが示唆された。また、早産例では一般集団に比してBVよりもむしろIFの頻度が上昇しており、これを対象とした治療が重要であることも示唆された。

P1-48-7 炎症性疾患としての歯周病は早産発症のリスクファクターとなり得るか

昭和大¹, 昭和大歯科病院歯周病科²大槻克文¹, 小出容子², 澤田真紀¹, 岡井 崇¹

【目的】妊婦の歯周病(PD)が早産発症のリスクファクターとなる可能性が指摘されている。しかしながら、早産には多様な因子が関与し、また、本邦においては妊婦のPDに関する研究自体が少なく、まだ一定の見解には至っていない。そこで、日本における妊婦のPDの発症率ならびに血清中のサイトカイン値とPDとの関連、およびPD罹患状態が早産のリスクファクターとなり得るかを前向きコホート研究にて調査する。**【方法】**当院産婦人科で分娩を予定して健診を受けている妊婦のうち、本研究の協力に書面で同意した165名(初産婦92名、経産婦73名)を対象とし、妊娠初期にPD検査と血清サイトカイン(IL-6)の測定を行った。その後、PD検査結果と今回の妊娠経過との関連を前方視的に調査した。本研究は当院倫理委員会の承認を得て行われた。**【成績】**1)分娩が既に終了した妊婦102名(初産婦58名、経産婦44名)の内、PD陽性例が77例(75.5%)であった。2)IL-6が測定可能であった78名の内、PD陽性例(54例)のIL-6は $2.0 \pm 4.7 \text{ pg/ml}$ で、陰性例(24例)の $1.2 \pm 0.4 \text{ pg/ml}$ と比較し高い傾向を示した。3)現在までに早産となった症例は7例で、そのすべてがPD陽性例であった。**【結論】**日本での妊婦PD有病率は75.5%であった。血清中のIL-6高値が全身に何らかの影響を及ぼす可能性を考えると、PDは局所の炎症のみならず、全身の炎症反応と関係するとも言え、それが早産発症に関与している可能性が示唆される。今後も、PDと早産発症との因果関係の解明に努めてゆきたい。